
オーセティア興亡記

フェイブレット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーセティア興亡記

【Nコード】

N08470

【作者名】

フェイブレット

【あらすじ】

富士山で天体観測を始めようとしていた近衛慎也は不思議な少女の声と共に突如出現した紅い月に呑み込まれ異世界『オーセティア』へと転移してしまう。

転移先が騎士団による厳重警備を受けていた地ということで即座に保護された慎也は『オーセティア』が発達した科学・魔術統合文明を持つ世界であると聞かされる。

転移に使用された『異界門』は数年〜数十年使用不可能であり、即座に地球へと帰還することは困難と判断した慎也は別の帰還方法を

探るためルーディアス王国の王都へ向かうことを決意するが、既に慎也は陰謀へと巻き込まれていた。

出発の日に返却された天体望遠鏡のケースに収められていたノートパソコンのOSが書き換えられたり、慎也の身边で次々と不自然なことが発生する。

少し普通じゃないSFファンタジーです。

もしかすると主人公に若干チート補正がかってるかもしれませんが…

…

序章 真紅の月（前書き）

スランプだと言っていたのに懲りもせず新作です。

メインは別作品ですので更新スピードはかなり遅めだとは思いますが
お付き合い頂ければ幸いです。

序章 真紅の月

西暦2015年7月18日(土)

PM 8:00

静岡県御殿場市

富士山御殿場口(標高1440m)

side このえしんや
近衛慎也

ミニバンの扉を開いて外に出ると、澄んだ夜空が目に入った。
久しぶりの富士山だからかもしれないが、東京から眺める夜空と
明らかに違うことが分かる。

圧倒的な星の数。

肉眼でここまでよく星が見える場所はそうそう無いだろう。

加えて今日の夜は月が昇らない。

すぐ近くに照明があるのは不安材料だが、こればかりは文句を言
っても仕方ない。

俺はミニバンの後ろに回り、扉を開いて望遠鏡を抱えていた父さ
んから望遠鏡をひったくり、観測ポイントに向かう。

25cm口径の反射望遠鏡を使うのは今日が初めてだ。

一体今日はどの星の姿を見せてくれるのだろうか。

決めるのは自分たちにも関わらずそんなことを考え、ふと上を見
上げた。

そこには、絶対にあるはずのない物が鎮座していた。

月だ。

真紅の月だ。

赤い月、というものは確かに存在する。

光の屈折によって昇った直後や沈む直前にそう見えることはあるのだ。

原理としては夕焼けや朝焼けと同じだ。

しかし、今俺の頭上にある『月』は、頭上という表現から分かるように、天頂部分に存在している。

それは絶対にあり得ないことだ。

赤い月は一時的な存在であって恒常的な存在では無いのだから。空高く昇れば次第に白銀の月へと変わるのだから。

しかも、その月は大きすぎる。

本来の月より3割近く大きいのだ。

いつの間にか俺はその場に立ち尽くしながら月を眺め続けていた。いや、目を離せなくなったのだ。

必死に顔を別の方向に向けようとしても、『目』がその行動を許さない。

どれだけの時間が経ったかは分からない。

夢か現かの区別もつかない。

だが俺は確かに聞いた。

『フフッ……ようこそ。 ブラッディ・カーニバル 血の舞踏会へ』

高らかに宣言する無邪気な少女の声を。

それとほぼ同時に月の姿が歪み、俺の意識は一瞬にして吸い込まれた。

序章 真紅の月（後書き）

誤字脱字や文法的におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？章 白銀の少女 第？話 『異界門』

？暦？？？？年7月18日

深夜

？？？・？？？

side 近衛慎也

目覚めは唐突に訪れた。
暗闇が一転して光に変わり、意識も半ば強制的に覚醒させられたのだ。

「……起きたようだな」

右隣から声が掛けられ、俺は首を右へと向ける。

そこにいたのは白の詰襟を着た男だった。

見覚えは無い。

……、……。

まさか、誘拐でもされたのだろうか？

……いや、それにしておかしい。

拘束もされていないし、誘拐犯にしては男はあまりに堂々として
ぎている。

そもそも誘拐犯が詰襟など着る筈が無い。

男は静かに口を開いた。

「私は聖堂騎士団古代遺物探査保護部部長のルキウス・ローザベルクという者だ。事後承諾で申し訳ないが、君の荷物を確認させてもらった」

理解が全く追いつかなかった。

聖堂騎士団だのアーティファクトだの、意味こそ理解出来るが、何故今ここで出てくるのか分からない単語に彩られた文章のせいだ。

「……災難だった、としか言いようが無い。『異界門』に巻き込まれるとは」

異界門？

一体何の事だろうか？

「そういえば、最も重要な事を言い忘れていた。ここは君にとって別の世界だ。君は、元いた世界からこの世界へと転移したのだよ」

今度こそ意味が分からなかった。

この状況が明らかにおかしい事は分かる。

俺がさっきまでいた場所は誘拐を画策することがほぼ不可能な場所だ。

夜の富士山には人氣が殆ど無い。

それにすぐ近くには父さんや父さんの友人がいたのだから、催眠ガスでも使わなければ誘拐は難しいだろう。

そこまでして誘拐する意味は無いだろう。

誘拐したいならばむしろ車に乗り込む直前のほうが成功率は高いだろうし、リスクも少ない。

……そして、思い出した。

『フフッ、ようこそ。 ブラッディ・カーニバル
血の舞踏会へ』

少女の声。

天頂に浮かぶ紅い月。

少女の声はともかく、紅い月は絶対に存在しないものだ。

幻覚か現実かは知らないが、原因がそれにあるのはほぼ間違い無いだろう。

「……とりあえず、名前を聞かせて貰っていいだろうか？」

俺は男……ルキウス氏の言葉に頷き、名乗った。

「近衛、近衛慎也です」

「近衛？ それが名字か？」

「はい」

日本でもかなり珍しい名字だし、『異世界』の人間ともなれば近衛部隊などとも混同してしまうのだろう。

「……旧貴族の家柄か」

その言葉に俺は驚愕し、この世界が幻覚である可能性が一気に上昇した。

日本人ならば歴史の授業で習う事もある近衛家はかつて五摂家と呼ばれる公家の頂点に位置した家だ。

大東亜戦争（太平洋戦争）直前の首相、近衛文麿などが有名だろう。

俺の場合は嫡流ではなく傍流で、半分分家のようなものではあるが、近衛本家と血の繋がりがいることは間違い無い。

『異世界』の人間が近衛家を知っている訳がないのだ。

「……何故分かるんですか？」

俺の質問にルキウス氏は表情一つ変えずに答えた。

「これまでに『異界門』は3度起動している。その全てが聖堂騎士団による異界調査だ。この際に『そちら側』の情報をいくらか手に入れていたからだ。学生向けの歴史書や地図などはかなりの量がこちらに持ち込まれている。私は古代遺物アーティファクトの研究者でもあるから、『そちら側』の情報も少々は知っている、だから分かった。『近衛』は非常に珍しい名字だからな」

確かに理屈は通っている。

しかし、あまりにも都合が良すぎないか？

本当にその聖堂騎士団が地球世界まで出張してきて調査をしたとしても、『近衛』の名字や日本の歴史よりもっと調査すべきところがあるように思える。

……、……。

「……ドッキリなら今のうちにネタばらししてくださいよ」

とりあえず、この言葉で相手が動揺すれば幻覚ではなく、たちの悪いドッキリだと証明できる。

もししなければ幻覚か現実かのどちらかだ。

「ドッキリ？ …… よく分からないが、とりあえず君が現在の状況をよく呑み込めていないことは理解した」

ルキウス氏は右手を上^{かさ}に翳し、言った。

「光よ、集え」

言葉と同時にルキウスさんの右手から光が弾け、半径5cm程度の球体を形取った。

「『そちら側』には存在しない魔術の一種だ。人為的な仕掛けは一切無いが、確かめてみるといい」

ルキウス氏の言葉に頷き、俺は手を光の中に突っ込んだ。

熱くはない。

多少暖かさは感じるが、点灯している豆電球や蛍光灯のような『熱さ』は無い。

俺は四方八方に手をやり、何か仕掛けは無いか確かめたが俺が手を伸ばせる範囲内に仕掛けは存在しなかった。

光の中に手を突っ込んで何も無い時点で仕掛けが無いのは分かるのだが。

「さて、次は私の口を見てくれ」

俺は指示に従ってルキウス氏の口を見る。

「今君が聞いている言葉と、口の動きは同期しているか？」

俺は首を横に振る。

全く違う。

『同期』を言うときにこのような口の動きはしない。
何かによって翻訳されているということだ。

「とりあえず、ここが君のいた世界でないことは理解して貰えたと思う」

……、……もう誤魔化すのはやめにしよう。

幻覚にしてはあまりにもリアル過ぎる。

自分がここにいる感覚もあるし、とてもではないがこれを幻覚と
いうことなど不可能だ。

「……はい」

「そうか。突然で申し訳ないが、少々質問をさせて貰っていいだろうか？」

「はい」

「君の元いた世界の暦を教えて欲しい」

暦、というのは年月日のことなのか西暦という名詞の事なのかどちらなのだろうか？

……向こうが地球の状況を知っているということは年月日を指していると考えて良いだろう。

俺はその問いに答える。

「西暦2015年7月18日です」

俺の返答が予想外だったのか、ルキウス氏の驚愕の眼差しと息を呑む音が聞こえた。

「……2015年、だと？　あり得ない。時空間が完全に歪んでいてもいいのか？」

ルキウス氏は一度頭を振り、俺に言った。

「今の言葉は忘れてくれ。君にはあまり関係の無い話だ。私はそれよりも遙かに重要な事を君に伝えなければならない。……異界門は今後10年は使用不能だ。つまり君が元の世界に帰還することも、今のところは……不可能だ。本当に、災難だった」

ルキウス氏の口から発せられた言葉は何とか現在の状況を把握しようとしていた俺の思考回路をショートさせてしまった。

帰れない？

ついさっきまでいたあの場所に、10年は戻れない？

……これは幻覚だ。たちの悪い夢だ。

目が覚めれば富士山の駐車場にいて、これから天体観測を始めるところなんだ。

そんな幻想は、もう抱くことが出来なかった。

俺の脳はすでにここを現実であると認識してしまったのだ。
今更幻覚や夢に変更する事など出来ない。

「だが、君が転移したときの詳しい状況が分かれば多少なりとも手を尽くす事は出来るかもしれない。本当に異界門による転移なのかもし違うならば、別ルートから帰還を果たせる可能性もある」

帰る方法を探してくれるのなら別は何だって話しても良い。
別の世界の人間なのだから。

「分かりました。状況を説明します」

俺が意識を失った時の状況を説明し終わった直後、ルキウス氏が口を開いた。

「『異界門』作動時に紅い月が出ると言う話は私も聞いたことがない。それに、フラッディ・カーニバル血の舞踏会という単語も気になる。だが、異界門の魔力量は明らかに激減しているし……とりあえず、君をこのまま解放する訳にはいかなくなった。何者かが禁呪を使用して君を喚びだした可能性も否定できないからな」

正直、このまま解放されても困るだけだ。

生活の当てなど一切無いし、住民票などの制度があれば就業すら出来ない。

「……王都へ行く気は無いか？」

唐突にそんなことを聞かれた。

「君はもしかするととんでもない重要人物なのかもしれない。転移した原因が異界門でも、禁呪でも、この世界を訪れた初めての異界人である事に変わりはないし、十分に国王陛下との謁見を行う資格があるだろうし、行く価値はあると考える。鉄道の切符を確保するのは多少難しいかもしれないが、馬車程度ならこちらで用意することもできる」

その提案は俺にとっても渡りに船だった。

今居る場所がどこなのかは知らないが、『王都』よりも小規模であるのは間違い無い。

職を探すにもまずは大きな都市に出なければ話にならないし、帰還するための情報を集めるのもやはり大きな都市の方が良いはずだ。

混乱しすぎてかえって冷静になっているのか、妙に頭の回転が速いな、と感じながら俺は承諾の返事をした。

「お願いします。王都に行かせて下さい」

「……分かった。馬車か鉄道かどちらになるかは分からないが、王都には連絡しておこう。……そうなるとこの世界の風習や文化を全く知らないというのはまずいな。少し、講義に付き合えるか？」

「はい」

情報は出来る限り手に入れておくべきだ。
いつ何処で何が起きるのか分からないのだから。

第?章 白銀の少女 第?話 『異界門』 (後書き)

誤字脱字や文法におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？話 異界人襲撃計画（前書き）

今回は短めです。

第？話 異界人襲撃計画

光暦3650年7月19日

未明

ルーディアス王国中部・リアス地方
商業都市ザーテン

side リア・ナイデルベルク

失敗した。

聖堂騎士が何故あれほど早く到着するのだろう。
お陰で計画は無茶苦茶だ。

異界人を回収することも出来なかったし、魔術をかける暇もなかった。

今年しか無いというのに、何故これほどに運が悪いんだろう。
せっかく禁呪まで使って喚んだというのに一瞬で私の手からこぼれ落ちるとは。

今聖堂騎士に近づく訳にもいかない。

彼らはとても強い。

それに、禁呪を使ってしまった以上『狩られる』恐れもある。

異界門のカモフラージュもそう長くは持たないだろう。

開幕のダンスを踊ることは出来なかった。

エティシリア・トリフェル

血の舞踏会まであと20日も無いというのに、このままでは王族

ゲット

たちに近づく事さえ出来ないではないか。

『異界人』などという稀少な人種をあの国王が捨て置く筈が無い。

必ず王都に招待して謁見を行おうとする筈。

それを見越した上で召喚したのに、聖堂騎士に保護されてしまっ
ては今のところ私に打つ手は無い。

異界人コノエシヤが王都に行くことになるのはほぼ間違い無い。

道中で襲撃するしか方法は無いか。

ならば問題は交通手段だ。

鉄道や乗合馬車なら襲撃は難しい。

今日立ってしまえば舞踏会の接頭詞として『血の（血塗れの）』
をつけることが出来なくなってしまうだろう。

徒歩や個人用馬車ならば容易に襲撃できる。

聖堂騎士を敵に回したくは無いが、あまり贅沢を言っていると目
的を達成することも難しくなってしまう。

2、3人程度の護衛ならば眠らせても構わないだろう。

まだ今は誰も殺すわけにはいかない。

聖堂騎士だけでなく王国親衛隊に勘付かれるのも致命的だ。

全ては国王を殺すため。

そしてその娘を殺すためだけに。

異界人コノエシヤはそのための囷であり生贄だ。

あの国王だけは私の手で臓物を引きずり出す。

あいつは憎き仇敵だ。

しかし、その娘に憎しみは無い。

せめてひと思いに首を刳ってやろう。

血の舞踏会までもう少し。

私の数年来の願いが果たされる時は間近に迫っている。

そのために、まずはあの異界人に魔術をかけなければ。

私の予測が的確なら、彼は有能な間諜になってくれるはずだ。

的外れだったなら別のプランを実行するのみ。

私の鎌は国王の血を吸う時を待ちかねているのだ。

今更計画を中止することなどありえない。

私は異界人を襲撃する算段を立てながら彼が滞在している宿舎付近に潜伏するのだった。

第?話 異界人襲撃計画（後書き）

誤字脱字や文法的におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？話 謎のOS

光暦3650年7月19日

明朝

ルーディアス王国中部・リアス地方

商業都市ザーテン

side 近衛慎也

夜が明けた。

この世界に来て初めての夜が明けた。

これまで和風の家に住んでいた俺はベッドなど利用する機会がなかったが、案外心地よいものだ。

多少柔らかすぎて寝るのに時間はかかってしまったが。

現在俺が滞在しているのは『異界門』のすぐ近くにある商業都市のザーテンという場所だ。

この世界では商業都市の上に大商業都市というカテゴリがあるらしいから規模的には決して大都市と言えるものでは無いが、かなりの賑わいを見せている事は間違い無い。

異世界というと剣と魔法が全てを支配するものだとばかり思っていたが、5階建てのビルや路面電車が走っているところを見るとこの世界は魔法一辺倒という訳ではないようだ。

そういえば昨日聞いた話では先代と先々代の文明が魔法や科学だけに傾倒したために滅亡した、と言っていた。

そのせいでこんな町並みになっているのだろうか。

このホテルに置いてあるストープは魔力を使っているが、洗面台は科学を使ったものだ。

多少いびつではあるが、科学と魔術が融合した世界はとても住みやすいのかもしれない。

昨日はルキウスからかなりの情報を手に入れた。

まず、俺は一応魔力を持っている事。

この世界の人間で魔力が全く無い者はいないらしいが異世界から来た場合どうなるか分からないということで検査されたが、最低でも人並みの魔力を持っているということは証明された。

そして、この世界の勢力図だ。

世界最大の国は今居るルーディアス王国だが純粋な軍事力のみで換算すれば海を挟んだ隣国であるルデキア帝國が一番らしい。

そしてこの世界には宗教は一つしか無く、『ラスキル聖教』という名だ。

ルキウスが属する聖堂騎士団はラスキル聖教の下部組織であり、ルーディアス王家と直接の関わりは無いこと。

ラスキル聖教は『レスティア法国』という国に本拠を構え、その国家元首は聖教の教皇でもあるということ。

宗教が一つしか無い、と教わったが、これについてはあまり信用できない。

ルキウスは聖教に属する人間だから教義に従って宗教が一つしか無い、と言った可能性も否定できないのだ。

聞いた限りではラスキル聖教は一神教のようだし、基本的に一神教は排他的で他の宗教を許容することはない。

延々と争いを続けているキリスト教とイスラム教のような関係がこの世界にもあるかもしれない。

今のところは関係ないが、恐らくこの世界にはかなり長い間滞在することになるだろうから形だけでも入信せざるをえない状況に陥る事もありえる。

神道が邪教扱いされたら間違い無くその状況だ。

……今考えるべきはそんなことではない。

王都に行つて国王と何を話すべきかを考えるのが先だ。

……まずは俺の身柄の安全を保障して貰わないといけないだろう。もしも『禁呪』などというものが関わっているのならば危険な状況に陥る事もありうる。

次に生活の保障も求めたい。

せめて就職が決まるまでの間の生活は保障してくれるとありがたい。

現在の俺の身分は決して低いものではないようだからこれも果たせるだろうと思う。

「近衛、入ってもいいか？」

ノックと共にルキウスの声が聞こえてきた。

「いいですよ」

ドアノブが傾き、ルキウスが部屋に入ってきた。

大きな、見覚えのある鞆を肩に提げている。

「これは近衛のだろう？ 全て安全が確認されたので返却する」

そう、それは、召喚の時に持っていた天体望遠鏡のケースだった。

「にしても、向こうの技術は凄いやうだな。研磨技術や精密作業の技術はこちらと比べものにならない」

ルキウスはそう言いながら俺にケースを渡してきた。
俺はケースを受け取り、床に置いて留め金を外して取っ手を上に引き上げた。

分解された天体望遠鏡と三脚、天体自動導入用のノートパソコンが入っている。

……このノートパソコンは起動するのだろうか？
ネット環境はともかくとして起動すればこの世界での地位を手に入れる事も容易かもしれない。

明らかにこれはこの世界にとってオーバーテクノロジーだ。

「……それと、聞こうと思っていたのだが、その平べったい機械は『向こう』の情報処理端末か？ 『星の方舟』に置かれているものとかかなり似ている」

『星の方舟』とは先々代の文明が建造した宇宙船だと昨日聞いた。
……それならばノートパソコンはオーバーテクノロジーというよりもロストテクノロジーに近いのだろう。

ルキウスは古代遺物の管理を行う組織の人間だしこのパソコンをアーティファクト情報処理端末だと看破してもさほど驚きはしなかった。

「はい、そうです。地球ではパソコンと呼ばれていますが、基本的に情報処理に関しては万能です」

「ふむ、本当ならばその『パソコン』を精密調査したいのだが……まあ今の我々には過ぎた代物のようだし、それは止めておこう。して、この『パソコン』は今でも起動出来るのか？」

「電池さえ切れていなければ多分起動できると思いますけど、異世界転移なんてものがあつたので壊れている可能性も否定できません。」

部品がかなり脆いので」

「一度起動して貰ってもいいか？　せめてそれだけは見させて欲しい」

ルキウスは興味津々のようで、俺はそれに応えることにした。

どうせ近いうちに起動を試す事は間違い無いのだし、ルキウス相手なら身分もはっきりしているので特に隠す必要もない。

「分かりました」

俺はノートパソコンを開き、電源ボタンを軽く押えた。

表示されたのは見慣れたWindowsのロゴではなく、意味不明のロゴマークだった。

MacやLinux、UNIXでもない。

そもそも、地球に存在する文字なのか？

それほどに訳が分からない文字にも関わらず、俺はその読み方と意味を理解することが出来た。

「セプト・リ・マローネア……」

意味は……マルノリアの情報処理システム。

「ほう、これは……古代マルノリアの遺物か。近衛、元々は勿論こ

のようなロゴではなかったのだろうか？」

「……はい。全く別のロゴでした。そもそもこんなロゴは見たことはないし、地球に居た頃の俺なら絶対に読めていません」

「するとやはり異界転移の影響か。転移の際にシステムが書き換えられたのだろう」

ルキウスは言うが、本当にそんなことがありうるのだろうか？

異世界転移はあり得ないことだが、独りでにいつの間にかシステム、というよりOSが書き換えられるなどということも同じくらいあり得ないことだ。

ウィルスが原因でも無いようだし。

ロゴから画面が切り替わり、文字が映し出され始めた。

『セスト・リ・マローネアのダウンロード必要領域を計算しています……』

『不要プログラムの削除を実行……』

『セスト・リ・マローネアの書き込み作業を開始……』

『必須プログラムのインストールを開始……』

『サブプログラムのインストールを開始』

『残留電力の低下を確認。これより周辺魔力の電力変換作業を開始します』

『全ての作業の正常な終了を確認しました』

何度も中止処理を行おうとしたが、全く受け付けなかった。電源ボタンを長押しして強制終了することも出来ず、作業が終わるまでの間見ていることしか出来なかったのだ。

そして現れたのは紺色の画面と小さなパスワード認証画面だった。

俺はこれまでのパスワードを入力し、エンターボタンを叩いた。

『そのパスワードは認可されていないコードです』

俺は一度首を捻り、『k o n o e s i n n y a』と入力する。

『認証に成功しました。メインサーバとの接続状況を確認します』

どうやら名前でないといけないようだ、俺の名前が何故認証さ

れるのだろっ。

このOSにとっては全く聞いたことの無いような人名だろうし、過去に同姓同名がいたとも思えない。

『メインサーバとの接続に失敗しました。現在メインサーバは緊急システムが作動しています。本システムはこれより機能制限モードにて起動します．．．．．』

ルキウスの言葉から察するにこのOSは先々代の文明のものだろうから、そもそもサーバが存在しないのだろっ。

そして、サーバへの接続がシャットアウトされている状況をOSは緊急システム起動によるアクセス拒否と認識したのだと考えられる。

どうやら異世界転移二日目からかなり胡散臭い出来事に見舞われているようだ。

本当に、これから先が心配だ。

第?話 謎のOS（後書き）

誤字脱字や文法的におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？話 大鎌の少女

光暦3650年7月19日

朝

ルーディアス王国中部・リアス地方

商業都市ザーテン・馬車駅

side 近衛慎也

鉄道の駅もそうだが、そのすぐ近くにある馬車用の駅も非常な混雑に見舞われていた。

大量の馬車が整然と並べられた姿はある種壮観だった。

俺は栗毛の馬に牽かれる馬車を尻目に、駅の奥へと進んでゆく。

その後ろにはルキウスと3人の聖堂騎士が付き従っている。

少し前、ルキウスが俺の部屋まで来た理由は俺の身分がこれからどうなるのかを伝えるのが主目的だったのだ。

公賓。

それが今の俺の身分だ。

異界からの初めての来訪者ということ破格の待遇となっているらしいが、俺にとっては好都合だとしか言えない。

賓客ならば警備も相当厚いだろうし、身の安全は保障されたと見ていいだろう。

王都行きの鉄道に襲撃予告が出ているせいで使用不能というのは不安要素だが、王国軍の部隊が馬車を護衛してくれるらしいから大

して問題にはならないはずだ。

煉瓦造りの建物の前に着くと、ルキウスが言った。

「この中に護衛部隊が待っている筈だ。ここから馬車までは彼らが案内してくれる。俺たちの役目はここで終わりだ」

聖堂騎士団はルーディアス王国と直接関係の無い仲介役のような存在だそうだから確かに王都まで着いて来られるはずもないか。

俺はルキウス達に礼を言い、ドアノブに手を掛けた。

「はい、ありがとうございました」

「いや、これも我々の使命だ。……近衛が無事向こうの世界に帰れることを祈っている。では」

ルキウスと聖堂騎士の3人は短い敬礼を行った後、踵きんすを返して駅の外へと消えていった。

俺はドアを開き、建物の中に入った。

「……貴方が近衛様ですか？」

即座に中にいた中年の男に確認される。

「はい」

「お待ちしております。本人確認の検査にご協力願えますでしょうか？　あまり言いたくはありませんが、もしも偽証だった場合非

常にまずいことになりますので……」

「あ、いいですよ」

俺は素直に頷いた。

ここで断つたら怪しまれるだけだというのは目に見えている。

「ご協力ありがとうございます。では、右腕を出して頂けますでしょうか？」

俺は男の指示に従い、右腕を前に出した。

「では、事前の検査結果と照合致します」

男は白い端末のような物を詰襟の胸ポケットから取り出し、俺の腕に押し当てた。

「一致率は…… 大丈夫です。本人だと確認できました。どうぞこちらへ。迎えの馬車が待っております」

男が奥に歩いて行き、扉を開いた。

俺は頷き、扉をくぐる。

待っていたのは白馬に牽かれた白地に金があしらわれた馬車だった。

いかにも賓客といった感じの待遇だ。

その側には15人程度の兵士が並び、こちらに向かって敬礼している。

俺はそれに応えて答礼し、兵士によって開かれた馬車の戸をくぐって席に腰を下ろした。

それに続いて先程の男が乗り込んでくる。

「私は今回の護衛部隊の隊長のカイル・アルセートと申します。王都までの道中までですがよろしくお願い致します」

「こちらこそ。王都まではどれくらいかかりますか？」

「早ければ今日の夕刻には到着すると思いますが、立太の儀が近づいて来ておりますので少々関所の通過に時間がかかるかもしれません」

「立太の儀？」

「端的に言いますと我が王国の正当な後継者が正式に決定されるのです。現国王は労咳を患っているので早めに後継者を指名することです」

労咳……結核の事だ。

異世界にまで結核はあるのか。

この世界の医療水準は分らないが、欧州の中世や近世程度ならば完全な死病だ。

「王宮医師や医療魔術師によって症状と病状の進行は最小限に食い止められています、あと3年は持たないだろうとの話でして……」

俺の疑問の視線を察したのか男……カイル隊長は沈痛な面持ちで言った。

「私からも国王陛下の病状のご快復を心からお祈りします」

「ありがとうございます。……では、そろそろ出発してもよろしいでしょうか？」

「ええ」

カイル隊長は外の兵士達に手信号で何か指示を出し、ほぼ同時に馬車がゆっくりと動き出した。

それから数刻。

幾度か丘や山を越え、これから大きな橋を渡ろうと言うとき、突然馬車が止まった。

「橋の上に誰かいます」

カイル隊長は静かに、しかし緊張した声で言った。

俺は身を乗り出してその姿を覗き窓から窺う。

人影は小さい。

150cmには満たないだろう。

人影は全身を黒い衣装で覆っていた。

身体の線から察するに、少女だ。

女、というには起伏に乏しいし、男にしては肩幅が狭すぎる。

そして、俺は見た。
その黒衣の少女が身の丈を越えるほどの巨大な鎌を背負っているの。

ほぼ同時にカイル隊長も気付いたようで、馬車内から手信号で護衛の兵士たちに指示を送った。

『その者！ この馬車におられる方は公賓なるぞ！ すぐに道を開けよ！』

この声は聞こえて当然だった。いくら馬車内とはいえ至近距離での怒声を防ぐ防音加工なんてものはなされていないのだから。
だが。

『道を開けよ？ クスツ、人に物を頼むならもっと丁寧な言葉で言わないといけないでしょう？』

この声は聞こえるはずがない。
数十メートルは離れているし、どう考えても大声ではないのだ。
何故、聞こえるんだ？

『お前に物を頼んでいる訳では無い！ これは命令だ！ 速やかに橋から立ち去れ！ さもなくば……』

『さもなくば？ 私を血祭りに上げようとも言っの？』

それは無邪気な少女の声。
しかしなんでだろう。

何故、その無邪気な少女の声がこんなにも恐ろしいんだ？

『御託はいい！　そこから立ち去れ！　立ち去らなければこちらにも考えがあるぞッ！』

『ふーん。その考え、って……こういうのかしら？』

黒衣の少女は鎌を抜き放って挑発する。

『公賓への襲撃だ！　全隊員、この娘を排除しろッ！』

『『『了解！』』』

兵士達は一斉に馬を下り、腰に下げた剣を抜き、少女に向かって駆けだした。

『本当につまらないわ。ここまでルーディアス軍が頭に血が上りやすいとは思わなかった。……仕方ないわ。一瞬で壊してあげる』

少女は地面を蹴り、兵士達に真正面からぶつかっていった。

どう考えても兵士に捕まえられる。

あんな体格で正面衝突して勝てるはずがない。

しかし、次々と転がされるのは兵士達のほうだった。

少女は兵士達の剣を鎌でまとめて受け流し、同時になぎ払ったのだ。

強烈な打撃により次々昏倒させられる兵士はある種滑稽ですらあった。

まるで劇のようだ。

苦戦、などというレベルでは無い。

そもそも戦いにすらなっていないのだ。

屈強な兵士たちは一人の少女に完全に弄ば^{もてあそ}れていた。

少女は兵士の剣筋を見ることがすらなく躲し、受け流し、傷つけること無く兵士を気絶させていた。

『こんな奴ら、殺す価値も無いわ』

俺の思考を読み取ったかのようにそんな言葉が聞こえてくる。

武器としては不適極まりない大鎌でどうすればあのような戦い方が出来るのだろう。

しかも殺さずに。

いつの間にか護衛の兵士はカイル隊長を残して全滅していた。

「近衛様、彼女の狙いは間違い無くあなたの命です。私が隙を作りますのでつい先程休憩した宿場町まで戻って下さい。王都には連絡を行いました但救援が来るまでにはかなりの時間がかかるでしょう」

カイル隊長は俺に小声でまくし立てると馬車の扉を乱暴に開いて外に出た。

どうやら俺の腕も掴まれていたようで、馬車から引きずり出されてしまった。

「あなたが隊長さん？ 悪い事は言わないからそこに居る能天気な異界人を私に渡して？」

「そのような事が出来るはず無いだろう。おとなしく武装を放棄して投降しろ。そのうち親衛隊が押し寄せてくるぞ」

ん？

ということはカイル隊長の部隊は親衛隊では無いのか？
たしかルキウスは『親衛隊』と言っていたはずだが……

「そう。なら仕方ないわ。あなたも少し寝ておきなさい」

その言葉と同時に、少女の姿が一瞬消え失せ、カイル隊長の背後へと出現していた。

少女は鎌を振り上げ、カイル隊長の頭を殴り飛ばす。

「さすがに田舎の騎士は弱いわね。親衛隊ならもう少しは楽しく遊べたかもしれないのに。これじゃあ、こっちがズルしてる気分だわ」

カイル隊長が崩れ落ちる姿を尻目に、少女は言った。

「こんにちは、異界の旅人さん。私の名前はリア・ナイデルベルクよ。あなたと遊ぶためにここに来たの」

少女は、にっこりと微笑みながら、俺に自己紹介を行った。

第?話 大鎌の少女(後書き)

誤字脱字や文法におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？話 謁見

光暦3650年7月19日

日没後

ルーディアス王国南西部・レノア地方
王都レードセリス・レードセリス城内

目を開いて最初に飛び込んできたのは豪華な装飾があしらわれた
シャンデリアと白い天幕だった。

「あ、目が覚められましたか？」

隣から声が掛けられ、俺は目を擦りながらその方向に顔を向ける。

「ここはレードセリスの王城です。賊に襲撃されるような拙い警備
で申し訳ございませんでした。ですがもう安全です。この王城は最
大級の警備態勢が整っておりますので」

話しかけてきたのはどうやら王城付の侍従のようで、いわゆるメ
イド服を着た20代半ばと思しき女性だった。

どうやらいつの間にか保護されて城まで送り届けられていたよう
だ。

「いえ、命に別状が無かっただけで満足です。……国王陛下との謁
見に関してはどうなっているのでしょうか？」

「謁見については準備は出来ております。近衛様が目覚め次第謁見

を行つと申しつけられているのですが、よろしいでしょうか？」

「ええ。よろしく願います」

「了解致しました。少々室内でお待ち下さい。後で係の者が案内に参ります」

侍従は深々と一礼して部屋から出て行つた。

……特に痛むところもないし、怪我の痕なども見当たらない。
襲撃を仕掛けてきたリアという少女は一体何をしたかつたんだろ
う？

……、……何か、重大な事を忘れているような気がする。
意識が消える直前の会話が全く思い出せない。
彼女は確かに俺に何かをしたはずだ。
しかし、それが思い出せない。

……無理に思い出そうとすると頭の中がこんがらがって余計に思
い出しにくくなる。
後でゆっくりと思い出すとしよう。

にしても、本当に豪華な部屋だ。
天蓋付のベッドなど見るとは思っていなかったし、調度品の数々
もこの世界の文化を全く知らない俺でさえ高級品だと分かる。
英国王室や日本皇室の生活空間はこんな所なのだろうか？

シャンデリアは蝋燭や電気ではなく魔力によって光を灯している
ようで、昨日ルキウスに見せて貰った魔力光に似た光を発している。

俺はベッドから立ち上がり、部屋の端にある小窓へと寄った。
部屋が明るいためかあまり遠くまでは窺えないが、どうやらこの
城は湖の畔ほとりに建てられているようだ。

その湖には漁火いさりびがいくつも焚かれ、今も漁をしていることが分かった。

そうやって窓の外を眺めていると、ドアがノックされた。

「近衛様、謁見の準備が出来ましたのでお迎えに上がりました」

先程の侍従とは違う声だ。

「分かりました。……」

俺は一度自らの姿を見て、このままではまずいことに気がついた。

「……あの、着替えとかはありませんか？ この服のまま謁見というのはすこし失礼に当たるような気がするのですが……」

「大丈夫ですよ。謁見の間の前に更衣室が備えられておりますので、そこで着替えて頂ければ」

「分かりました。今出ます」

俺は窓から離れ、部屋の外に出た。

廊下には赤色の絨毯が敷かれ、天井には部屋にあった物より二回

りほど大きなシャンデリアが一定の間隔でつり下げられている。

「では、ご案内致します」

侍従は右の方向を手で指し示すと、俺の先を歩き始めた。

幾度か扉をくぐり、黒檀製と思しき大きな扉が鎮座する場所まで案内された。

「この先が謁見の間となっております。更衣室はこちらになります。着替えはバスケットに用意されているものをお使い下さい。簡略式の礼服ですので着られないということは無いと思いますが、もしも着用の方法が分からなければ洗面台の隣に据え付けられていますボタンを押して下さい。着付けのサポートを行います」

侍従は黒檀扉の隣にある小さな白い扉を手で指した。

俺は頷き、白い扉の中に入った。

確かにかなり略式化された服のようで、高校の制服などとそれほど変わらない手順で着ることが出来た。

しかし、黒の燕尾服なんてファンタジックなこの世界に存在するとは思わなかった。

……略式の正装なんて元の世界では重大な失礼にあたる筈だが、この世界では少し事情が違うのだから？

更衣室から出ると侍従が黒檀の扉を指して言った。

「では、お入り下さい。近づけば自動で開門致します」

俺は侍従の言葉に従って黒檀の扉に向かって足を踏み出した。

殆ど音も立てずにその大扉は奥に向かって開いていき、部屋の中にある二つの玉座と整然と並ぶ十数人の騎士が目に入った。

俺は一度深呼吸し、謁見の間へと足を進める。

「君が近衛慎也君か？」

玉座まで10mというところでそこに座っていた壮年の男が口を開いた。

「はい」

「昼の件は本当に済まなかった。もう少し警備を厚くしていれば襲撃も受けなかったかも知れない。国王としてお詫びさせてもらう」

突然の謝罪に面食らいながら俺はこう返した。

「い、いえ、私の命に別状は無いのですからどうかお氣になさらないで下さい」

「いや、我が国の兵士がしっかりとしていれば防げた事件であることに変わりはないのでな。……とりあえず本題に入らせて貰うが、君がこことは異なる世界から来た、というのは本当なのか？」

思ったよりも早く本題へと行き着いた。

俺は国王の質問に大きく頷く。

「はい。私が元いた世界はこの世界と違って魔法がありませんでしたし……少々嫌味になってしまいかもしれませんが、もつと科学が発達していました」

「君の持っていた望遠鏡や情報処理端末は確かに我々の技術で作ることは不可能だ。そういう点で君は明らかにこの世界の人間で無いということは分かる。それなら聞かないでいいと思われるかも知れないが、一応確認はしておくべきだと思った。……少し、君がいた世界の情報を教えては貰えないだろうか？」

「分かりました。質問には答えられる範囲でお答えします」

……、……、……。

一通りの話を終えると、国王は大きなため息を吐いた。

「……君の世界はそこまで進んでいるのか。教育制度や社会保障制度も充実しているようだし、うらやましいことこの上ない。我が国もそれなりに裕福だという自負はあるが、まだ飢えに苦しむ人々がいることは間違い無いから……。ところで、君はこれからどうするつもりだね？ 世界を回って帰還の方法を探る、というのならば路銀を預けることも出来るが……」

やっと俺が本当に話したかった所まで到達した。
そう、これからの生活をどうするかは真剣に考えなければなら
ないのだ。

「そのことなのですが、この王都で職を探す、ということは出来ま
せんか？ 正直な所、この世界を巡って帰還の方法を探すのはあま
りにも非合理的で成功率が低いと思うんです。それよりももう一度
『異界門』が使えるようになるまでこの国に滞在するべきかなと考
えているのですが……」

「ふむ、ならば今ちようど良い仕事を紹介することが出来る」

国王のあつさりとした答えに面食らいながらも俺は尋ねた。

「その仕事というのは何ですか？」

それは、俺の予測していた答えの遙か斜め上を行っていた。

「……私の娘の遊び相手になってはもらえないだろうか？」

「……はい？」

何故そのような仕事を俺に紹介するのだろうか。

そういうものは基本的に執事とかの仕事では無いのか？

「いや、娘は来月で16の誕生日を迎えるのだが、これまで同年代
の男性とまともに会話したことが無くてな。王室にここ40年男児
が生まれていないという理由もあるのかもしれないが、少々男性に
ついて無知なのだ。君は元の世界で貴族階級にあったようだし、家

柄的にも王室の仕事を任せるに足ると感じる。勿論無理強いはいが、考えて貰えるとありがたい」

……そういう事情か。

この世界の王族も地球の王族と似たような問題に遭遇している訳だ。

しかし、俺は自分のことを貴族だとは言っていないぞ。

かつて貴族階級にあった者の末裔だと説明したのに、妙な勘違いをしているようだ。

それに、16歳の王女、ねえ。

俺の脳内には小説などで読んだ高圧的な『お姫さま』像が浮かび上がる。

……まあ、割の良い仕事だし受ける価値は十分にあるか。

どんな性格だろうと一緒に遊んでいるだけで生活が出来るというのは非常に楽な仕事だ。

「……その仕事、請けさせてもらえませんか？」

「おお、請けてくれるか。ではその方向で話を進めさせてもらっていいか？」

「はい」

「契約用の書類などは明日の昼までには完成すると思う。詳しい話はまた明日に話し合おう。君も少し食べ物が恋しくなってきたいるようだしな」

と、国王には易々と空腹を見抜かれてしまった。

「食事は一階の食堂に用意されている筈だ。侍従に案内して貰ってくれ。その後は風呂にでも入って、今日の所は早めに休むといいだろう」

「分かりました」

「では、私も自室に戻ることにするよ。良い夜を」

「国王陛下も、良い夜を」

俺はそう返答して謁見の間を出た。

当面の生活の当ては異様に簡単に手に入った。

あの少女だけが気がかりだが、まあ、なるようになるだろう。

そう思いながら俺は侍従に案内されて食堂へと赴くのだった。

第?話 謁見（後書き）

誤字脱字や文法におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？話 王女セティア（前書き）

更新が遅れに遅れまして誠に申し訳ございません。

スランプの影響が思ったよりも深刻だったようで、筆が全く進まない日々が何日も続いておりました。

今後も不定期的な更新になることが予想されますが、これからも見守って頂けると筆者にとってこれ以上ない幸いです。

第？話 王女セティア

光暦3650年7月20日

昼（午後）

ルーディアス王国南西部・レノア地方

王都レードセリス・レードセリス城

第12階層・『鷹』の回廊

side 近衛慎也

王城職員としての契約作業が終わった直後、俺は王女に会うこととなった。

王城の最上階にあたる12階に存在する鷹の回廊を進み、その場所へと到達する。

少し茶色がかった白の扉の横には『むくとり棕鳥の間』という金字の表札が下がっていた。

俺はその扉を二度ほど軽く叩きながら言った。

「本日から王女殿下の世話係となる近衛慎也と申します。入ってもよろしいでしょうか？」

「お父様が言っておられた方？ どうぞ、お入りになって下さい」

返ってきた返事はとても澄んだ声で、俺はその声に従って扉を開いた。

部屋の中にいたのは小さなテーブルで紅茶を啜る少女の姿だった。その髪の色は濃紺で、国王の髪色を強く感じさせる。

……そして思った。

世界にはここまで可憐な人がいるのかと。

国王もそれなりに整った顔立ちだったが、彼女はそれを圧倒していた。

可愛い、だとか綺麗、だとかそのような言葉で表せるようなものではない。

どちらかと言えば、純粹な『美』そのものだった。

クラスで一番、学年で一番などとは絶対に違うその壮麗な姿は、さしずめ『聖女』と言ったところだろう。

「あら？　どうかなさいましたか？」

俺がいつまで経っても部屋に入ってこないのを疑問に思ったのか、少女が声を掛けてきた。

「あ………すみません」

俺はもう一度礼をして、部屋の中へと歩を進めた。

「そちらに掛けて頂いて結構ですよ」

少女は自らの正面にある椅子を指差して言った。

俺は椅子に歩み寄り、少し引いてから腰掛ける。

「私はセティアと申します。近衛さま、これからよろしく願ひし

ますね」

「いえ、こちらこそよろしく願いします、セティア様」

俺がそう答えると少女はクスクスと笑いながら言った。

「セティア、で構いません。せっかくの遊び相手なのに、他人行儀だときこちないでしょう？」

「しかし……」

相手は仮にも王女だ。

呼び捨ては不敬にあたるのではないだろうか？

「お父様から話は聞いておられるのでしょうか？ 私は対等な付き合いが出来る友人が一人もおりません。ですから、近衛さまとは主従関係ではなく、あくまでも友人としてお付き合いしたいのです」

…… 本人がここまで言うのだから、別にいい、か。

「…… 分かりました。よろしく願います、セティア。それと、僕の事も慎也と呼んで頂けると嬉しいです」

「それではただ単に名前の呼び方を変えただけではないですか。名目上この…… 慎也さんは私の世話係になっていますが実際は遊び相手なので、あまり不敬だとかそんなことは考えて頂かなくて結構なんですよ」

妙な所でこのお姫さまは強情なようだ。

しかし、まあそちらのほうが付き合いは気軽か。

「分かったよ。非公式な場所では普通に話せばいいんだろ？」

俺の言葉に王女……セティアは大きく頷く。

「はい。……とりあえず、お茶でもどうですか？」

そしてセティアはお盆に置かれていたティーカップを俺の前に置いて、花柄のティーポットから紅茶を注いだ。

「あ……頂きます」

俺はカップの取っ手に手を掛け、音を立てないように少し啜った。

どうやら、これは紅茶とは違うようだ。

色は明らかに紅茶なのだが、味はどちらかというとミントのように爽やかなもので、ほのかに甘みがある。

こちらの世界ではこれが一般的なお茶なのだろうか。

「……慎也さんのいた世界のこと、少し教えて貰っていいですか？」

お茶についての質問をすべきかどうか迷っているところに、セティアから声が掛けられた。

「ああ、いいよ」

元から予想していた質問だけあって、俺は即座に頷いていた。

2時間程度、何度かの質問を挟みながら俺は元の世界のことをセティアに話し、ついに世界転移についての話まで到達した。

「血の舞踏会……ですか？」

「ああ。実際に聞こえたのはブラッディ・カーニバル、って単語だったけど、同時に血の舞踏会って言葉も頭に入ってきたから訳語関係になるのかもしれないけど、とりあえずそういう言葉が聞こえた直後に意識が消えたんだ」

そんな筈はない。

ブラッディ・カーニバルを日本語訳すれば『血の謝肉祭』になる。どこがどうひっくりかえろうと舞踏会なんて訳は存在しない。

「……話は変わりますが、慎也さんは王都に来る途中に何者かの襲撃を受けたと聞きました。その犯人と世界転移の時に聞こえた声に何か共通点などはありませんか？」

……、……。

共通点ならある。

あの声は……あの時に聞こえた声は、橋の上にいた少女の声と完全に一致する。

しゃべり方もどこことなく似ているとは思っていた。

そして、あの少女は……圧倒的な強さだった。

もしかすると、俺をここに召喚したのはあの少女なのか？

「……襲撃してきたのは12、3歳くらいの女の子だった。異様に大きい鎌を持って、護衛の兵士達を圧倒してた。それで……確かに、

転移の時に聞こえた声と、殆ど同じだった」

長い沈黙の後、セティアが口を開いた。

「……もしかして、慎也さんはその『血の舞踏会』に必要な人物なのかもしれません。元々はその襲撃者が慎也さんを回収する予定で、しかしすぐに聖堂騎士に発見されたために回収することが出来なくなつた。……聖堂騎士は世界的宗教であるラスキル聖教の執行機関です。その聖堂騎士を敵に回せば危険だと感じた襲撃者は聖堂騎士から我が国の軍に引き渡された後に慎也さんを回収する算段を立てた、と考えれば辻褄は合いませんか？」

いや、セティアの推論には一つだけ重大な欠陥がある。

それは……

「いや、それはありえないよ。護衛は全滅して、俺も気絶させられたんだ。回収されていたなら俺がここにいる筈が無い」

「……しかし、慎也さんに謀報系の魔術が掛けられた形跡もありませんし……襲撃者と転移の時の少女はまた別の存在なのでしょうか？」

待てよ。

襲撃者が狙っていたのが俺の身柄では無いとしたらどうだ？
襲撃されてから、何か無くなったものは無いか？

……、……、……ッ！

そうだ。

一つだけ、ここに来てから見かけていないものがある。

……それは、とても大切な物。

そう……口径数20cmの……望遠鏡だ。

「……一つだけ、襲撃されてから見ていないものがあるんだけど」

「何、ですか？」

「大きな黒い鞆だ。中には望遠鏡と、パソコンが入ってる」

「パソコン？」

「言ってしまえば高性能な情報処理端末だよ。この世界にきてからどうも調子がおかしかった」

「……それは、これくらいの革製鞆ですか？」

セティアは手を広げながら言う。

確かにその位のサイズだった筈だ。

「ああ。使ってるのは人工皮革だけど、大きさは合ってる」

「その鞆なら今城内にあります。一応アーティファクトでないことは聖堂騎士の報告から分かっていますけれど、襲撃者によって魔術が掛けられている可能性が否定できないため現在は地下の物品調査室に置かれている筈です。勝手に中を開けてすみません」

「いや、別にいいよ」

しかし、それなら尚更理解出来ない。

あの少女は一体何故俺を襲ったんだ？

そういえば、あの少女の名前を聞いたような気がする。

昨日は襲撃された事実と異世界転移の話で精一杯で、国王にも言うていなかったが、間違い無く俺は少女の名前を知っているはずだ。……なんという名前だった？

……、……。

『こんにちは、異界の旅人さん。私の名前はリア・ナイデルベルクよ。あなたと遊ぶためにここに来たの』

俺が最後に聞いたのは確かそんな台詞だった。

「話は変わるけど、もしかしたら俺、襲撃者の名前を知っているかもしれない」

「教えて下さい。もしかすると心当たりがあるかも知れません」

セティアの言葉に頷き、俺はその名前を口にした。

「リア。リア・ナイデルベルクと名乗ってた」

その言葉と同時に、セティアの顔が一瞬にして白に染まる。

「リア・ナイデルベルク……？ ……ということは得物は鎌ですか？」

「ああ。知ってるのか？」

「勿論です。箝口令が敷かれているため一般市民で知っている方は

まず居ないでしょうが、各国の首脳にとつては最大級の脅威です。
リア・ナデルベルクは、半年前に我が国と敵対関係にあるルデキ
ア帝国の女王、宰相その他王族を殺害し、帝国内の高級貴族を次々
と殺害しました。ある時は闇に紛れ、またある時は白昼堂々と。必
ず黒い衣装と身の丈ほどもある大鎌を携えて現れるために付いた渾
名は『黒衣の死神』。この50年間で最強最悪の殺人鬼とも言われ
ています。素性出生から国籍まで全てが不明。ですがその力は圧倒
的。既に確認されているだけでも500人以上を殺しています」

500人？

だが、あの襲撃の時を思い起こせば納得出来る。

仮にも公賓の護衛を任される位なのだから、護衛の兵士達の練度
は普通よりも高かっただろう。

少女はその兵士達をまるで遊びだとも言うかのように手玉に取
っていた。

そう、圧倒していた。

殺そうと思えば殺せたはずだ。

それを無力化するだけに留めたのは、やはり少女に何らかの考え
があるからなのだろうか？

もしくは……俺が気絶した後には殺されたか。

「しかし、彼女が誰も殺さずに立ち去った、という話は聞いたこと
がありません。襲撃の状況を考えると間違い無く狙いは慎也さんで
しょうし……やはり、『血の舞踏会』が何か関係しているのでは
うか？」

本当に、どういふことなんだ？

俺は、もう既に少女の計画に利用されているのか……？

「……とりあえずこの話は後でお父様に報告するとして、慎也さん。少し中庭までどうですか？」

俺の様子が少しおかしい事に気付いたのか、セティアは言った。

「中庭？ うん、分かった」

とりあえず、何も確定しない状態で結論を急ぐのは愚策だ。
今は心を落ち着けるのに専念すべきだろう。

俺はそう考えて、セティアの背中に付いていくのだった。

第?話 王女セティア（後書き）

誤字脱字や文法的におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？話 王女の告白（前書き）

更新が非常に遅れてしまい誠に申し訳ございません。

別作品に続いて、ようやく更新を再開することが出来ました。

しばらくはクオリティ、更新速度共に不安定な状況になるかと思いますが、どうかご了承ください。

第？話 王女の告白

光暦3650年7月20日

昼（午後）

ルーディアス王国南西部・レノア地方

王都レードセリス・レードセリス城

第2中庭・鈴蘭の庭

side 近衛慎也

セティスに連れられてやってきた中庭は、俺が想像しうる「中庭」のイメージを超越していた。

中心には三十数メートル四方ほどの湖（池？）が存在し、何処かへと流れている。

花壇に植えられた花々は庭を明るく彩り、全面に貼られた芝生は綺麗に切りそろえられており庭師の苦勞の跡がうかがえた。

更に白色のベンチや椅子、テーブルなどもそろえられていて、すぐにでもお茶会を開けそうな雰囲気だ。

「慎也さん、こちらにお掛けになって下さい」

セティアはベンチの一つを指差しながら言った。

俺がベンチに腰掛けると、セティスもそれに続いて真横に座る。

ここで話をしよう、ということだろうか。

「ええっと……慎也さんはお父様の病状について知っておられるでしょうか？」

「知ってるよ。昨日謁見したときは労咳に苦しんでる、って感じではなかったけど」

突然彼女の部屋にいたときは全く違う質問をぶつけられたことに困惑しつつ俺は答えた。

国王は熱を出している様子も、咳き込むことも無かったから今は病状が安定しているのか、まだ初期なのかと思っていた。

「そうでしょうね……お父様は今薬を使っていますから。……何度
もやめて下さいと言ったのに」

止めると何回も言った……副作用が強烈だったりするのだろうか。
抗がん剤のように毛が抜け落ちたり嘔吐したりするようなものな
のか？

「それ、どういう薬？」

俺の質問に対してセティスは顔を下に向けながら小さな声で呟い
た。

「……病気を表面化させない薬です。一種の、麻酔です。病状の進
行停止を図る薬との併用が禁忌になっているので、寿命はどんど
短くなっています」

「それって、つまり……」

言葉に割り込んでセティスは頷いた。

「見た目は何の異常も無くても、実際は病気は進行しています。こ
のまま、ずっとあの薬を使い続けられ……半年は持たないでしょう。
私の予感が正しければ、3ヶ月で……」

何故国王がその決断に至ったかは分からない。

ただ、相当悩んだ末の結論であろうことだけは推し量れた。

「そういえば、馬車に乗るとき『立太の儀』がどうこうって話を聞いたんだけど、もう次期国王は内定してるのか？」

ありえないと思うが、次期国王が決定した後すぐに死んでしまえば他の候補者が異議を唱える時も無くスムーズに新体制に移行できると考えた……そんな可能性もある。

「いえ、まだ候補が4人に絞られた段階です。……もし内定していたとしても、立太の儀の三日前になるまでは内定者、候補者にも秘密ですので……」

どうやら随分と秘密裏に進められる計画のようだ。

……俺の予想が当たっている可能性は少し、上昇した。

「その候補者って、教えて貰える？」

「はい。候補者は一般にも公開されていますから問題ありません。まずはお父様の従兄弟にあたるアルゼム・レム・ルースエディア様。そしてお父様の姪にあたるレナス・レム・ルースエディア様。私の従姉妹ですがもう29歳になります。次にレシア・フォン・マテイリオール様。この国の筆頭公爵家の長であり、お父様と懇意な間柄で、私も幾度かお話させて頂いたことがあります。最後に、セティア・レム・ルースエディア……私です」

セティア以外は聞いたことのない名前だった。

名前を知っている王族がセティアしかいないのだから当然か。

「最有力候補は分かるか？」

「血縁関係だけを考えれば私ですが、十代の人間が国王を務めた事例が皆無のためまずないでしょう。次に、お父様との仲を考慮した場合マティリオール様ですが、こちらは血縁が弱いです。レナス様は少し前にお父様と大喧嘩したので確率はかなり低くなりそうですし……こんなところで言うべきことはありませんが、武芸には秀でていますが……為政者としての能力があるかは疑問です。総合的に考えれば、アルゼム様が筆頭となるでしょう」

ということは国王の考えている次期国王はアルゼム氏以外だろう。他の候補とは違って、アルゼム氏には王になるとして、決定的な欠点というものが存在していない。

他の候補の場合、年齢、血縁、資質が内定を妨げるに十分な要因であるが、アルゼム氏にはそれが無いのだ。

恐らく、アルゼム氏は既に自分が次期国王になると考えているだろう。

それなのに、国王が違う人間を次期国王に選定したとなれば反発することは必至。

国王はそれを恐れているのではないだろうか。

現在の外交情勢がどのようなものかは知らないが、先程セティアの部屋で聞いた敵国……ルデキア帝國が敵であるルーディアス国内で後継者を巡る争いが起きている最中何もしてこないとは考えにくい。

下手をすれば好機と考え戦争に持ち込もうとする可能性すらある。その状況を回避するのに最も好都合な方法は……アルゼム氏を後継者に据えるか、後継者が決まった時点で自らの命を絶ち、アルゼム氏に異議を唱える時間を与えないかのどちらかだ。

そして、前者を選ばなかったということは、アルゼム氏は次期国王になるにあたって、重大な欠点が（少なくとも国王にとっては）存在するのだろう。

少し、何かが見えてきた気がする。

「最後に、一つだけ不可解な事があるんです」

セティアは俺を真剣な表情で見つめながら言った。

「それは、何だ？」

「慎也さんには失礼かもしれませんが……私に遊び相手を付ける、
というのはお父様らしくないのです」

「どうということ？」

「これまでも私の世話係に立候補してきた方は多数いらっしゃるんです。そして、これまでは全て断ってきたんです。なのに、今回はあっさりと認めた……」

確かに、それはおかしい話だ。

死ぬ前に娘の結婚相手を決めておく……というのならはまだ分かるが、遊び相手を死ぬ前に選ぶ、というのは少し理解に苦しむ。

自分が居なくなっても娘が寂しくないように？

それは違う気がした。

代わりに浮かんできたのは、考えた事を無かったことにしたい位突拍子もない予想だった。

「一つ、聞いていいか？」

「え、ええ。いいですよ」

「『遊び相手』や『世話係』は、何かの隠語か？」

そう、例えば

「……はい。ご明察、といったところですね。その二つは王族や貴族にのみ通じる隠語です。……『婚約候補者』。それを意味します」

返答を聞いて俺はがっくりと肩を落とした。

俺は、あの国王に騙されたのだ。

「お父様からは慎也さんが気付くまでは言いつけられていたのですが、まさか半日と経たずに気付かれるとは思いませんでした」

セティアは苦笑しながら頭を下げた。

「騙してしまって申し訳ありません。ただ、あくまでも『候補者』ですから気に入らなければすぐにでも降りて頂けますし……」

「……普通なら、誰も降りやしないと思うけどね」

小さく呟く。

そう、もしも俺がこの世界の住人で、セティアの世話係に抜擢されたなら、絶対に自分から降りることはない。むしろ、セティアが嫌がる程にアプローチを仕掛けるだろう。

それは、アイドルと友達になったのと等しい。

彼女の顔立ちだけでも十分なのに、更に王族という付加価値が上乘せされる。

セティアから結婚を申し込まれたとして、断る人間は王族に恨みを持っている奴くらいのもんだろう。

だが、俺は異邦人だ。

遠く、遙か彼方の世界・地球から来た異世界人。

俺はここに定住するつもりはない。出来る限り早く元の世界に帰りたいのだ。

だから、これから仲が深まっていったとしても、セティアと結婚することだけはありえない。

……でも、まあいい。

しばらくはどうせ戻れないんだ。

『婚約候補者』としてではなくあくまで『友達』として付き合っていけばいい。

「え？ 何か言いましたか？」

「とりあえず、友達でいいよな、って言ったんだよ」

俺の言葉にセティアは頷き、笑顔で言った。

「はいっ」

……それが何故か、『黒衣の死神』リア・ナイデルベルクの無邪気な笑みと重なった。

第?話 王女の告白(後書き)

誤字脱字や文法におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？章 王都騒乱 第？話 『友達』

光暦3650年8月3日

朝

ルーディアス王国南西部・レノア地方

王都レードセリス・レードセリス城

第2中庭・鈴蘭の庭

side 近衛慎也

「私の勝ち、ですね」

セティアの宣言と共に、俺は木剣を宙に放り投げた。

「もう少し手加減して欲しかった。セティア、お前強すぎだから」

「手加減はこれで精一杯ですよ。これ以上手加減すれば訓練になりません」

それなりに長い打ち合いだったにも関わらずセティアは汗一つ浮かべていない。

セティアとの剣術訓練が始まって2週間が経とうとしていた。

俺が『世話係』の真の意味に気付いた翌日、国王に呼ばれ『世話係ならばもしもの時王女を守れなければならん』とか言われて王国軍の訓練場に連行されたのだ。

むさ苦しい兵士たちに木剣で殴りまくられ、痣だらけになった俺

は3日と経たずにセティアに泣きつく羽目になった。

セティアさんはそれはもうとてもいい提案をしてくれました。

『それなら、朝は私と剣の稽古をしましょうか？』

無論、最初は大喜びしましたよ。

『どうせ、訓練にもならない易しい訓練だろう』なんて。

セティアの華奢な容姿から全てを判断したのが間違いでした。

確かに、痣は減りました。

その代わりに……

「やっぱり、毎日言っている通り慎也さんには体力が絶対的に足りていません……とりあえず庭を50周ほど走りましょうか。その後は素振りですね」

重篤な筋肉痛に悩まされることになったのです。

毎日2回行われる模擬戦に勝てばその日の訓練は終了、負ければ罰則と提案された。

で、やっぱり最初は『あんな線が細くてひ弱なセティアに勝てないわけがない』と侮ってそれを快諾したわけなのだが、今先程の通りセティアは滅法強かった。

正直、俺が剣術学んでなんか意味あるの？ と疑うレベルだ。

地球でフェンシングとかやってたなら確実にオリンピックで金メダルを取るだろう。

あそこまで強ければ相当筋肉はついているはずなのだが、セティアにそのような気配は微塵も無い。

魔術的な強化でも行っているのだろうか。

だがそれなら俺にもその魔術を掛けてくれても良いはずだし……まさか、国王は俺が筋肉痛と青痣に苦しむのを見るのが楽しみで、わざと強化についての話をしていないのか？

「慎也さん？」

セティアに訝しげな視線を送られ、俺は慌てて頷き立ち上がった。

「分かってる」

ただ、セティアの凄いところは、勝者である自分も俺と一緒に走ることだ。

もしかすると、セティアにとってはいつものトレーニングと一緒に、勝敗なんて関係無いのかもしれないが……相当の努力をしている事は明白だった。

俺は木剣をテーブルに立てかけ、手招きするセティアの後を追った。

中庭50周というのはメートル法に換算すればだいたい20キロメートルほどになるだろう。

20キロというと車を使うような距離で、ハーフマラソンの距離に近い。

それを毎日走っているのだから、俺の体力も大分と高くなってきているのではないかと思うのだが、セティアにとっては不足らしい。

「今日は、素振りが、終わったら、少し外に、出ましょう、か」

並走するセティアが途切れ途切れの声で告げる。

セティアの言う外、とは建物の外ではなく城の外、ということだ。さらわれでもしたら大変だということで外出の際には必ず親衛隊が付き添うのだが、唯一それが必要ない『外』が存在する。

この城はレノア湖に浮かぶ島に建造されていて、城の裏手には少しだけ外側に城壁がなく、湖に面した部分がある。

そこは親衛隊の詰所のすぐ近くで、かつ見通しが良いため唯一親衛隊を伴わずに出歩ける場所なのだ。

彼女はそこに行こうと言っているのだろう。

「分かつ……た」

……俺は少しだけ、走るペースを速めた。

250回の素振りを終え、俺とセティアは一度城内に戻り、汗まみれになった服を着替えた。

日本と気候は少し違うといえ、今は夏。

昼に近づくにつれ気温はぐんぐんと上がっていく。

蝉の鳴き声がないためか若干暑苦しさは軽減されるが、同時に一抹の寂しさも覚えてしまう。

本当に、異世界にいるんだと。

王女と他愛もない話をしながら廊下を歩く俺を城の人はどう見ているのだろう。

身元も分からない怪しい異界人と見られているのだろうか。

個人的には、そう思われても仕方ないと思う。

というよりこれまでの過程が異常なのだ。

「慎也さん？ 今日の慎也さん、なんかずっとぼーっとしてますよ」

セティアの呼びかけでやっと俺は歩みを止めていたことに気付き、もう一度足を踏み出した。

確かに、今日の俺は注意力散漫だ。

最近を考え込むことも少なくなってきたと思っていたのだが、どうやらまた振り返ってしまったらしい。

城の地下道を通って俺たちは外に出た。

眩しい陽光に照らされ、思わず目を細めてしまふ。

「今日は一段と日射しが強いですね……」

セティアは地下道から外へ駆け出し、水辺の芝生に腰を下ろした。

「慎也さんも、こっちですよー」

セティアの呼びかけに手で応じ、俺も水辺にある芝生に座り込む。

「空、今日は雲一つありませんね。そういえば、知ってました？」

「何？」

「今日の夕方、空中大陸レアンノがこの上空を通過するんです。最近はずっと北を回っていたので、南に来るのは半年ぶりなんですよ」

空中大陸レアンノ……それは、古マルノリア文明、新マルノリア文明の遺跡で唯一の『生きた』遺産だ。

今も大陸を空に保つ装置が作動し続け、5000メートル近い高

空を飛んでいるという。

また、ラスキル聖教誕生の地とも言われ、その宗教的格式は現在のラスキル聖教総本山レスティア法国に存在する聖地セレスティアよりも高い。

俺が知る空中大陸レアンノについての知識は全てルキウスに教えて貰ったものだ。

そういえば、ルキウスは今どうしているだろうか。

もしルキウスに会わなかったならば今の俺の生活は無かっただろうから、それは感謝しなければいけないな。

聖堂騎士団の古代遺物なんとか部長だったから普通に暮らしている限りでは会う機会は無いだろが、会えたらもう一度礼をしたかった。

……と、また思考の渦に飲み込まれるところだった。

「そうなのか……下から見る空中大陸、ってどんな感じなんだ？」

俺の質問にセティアは苦笑いしながら返答した。

「まあ、土の塊……にしか見えませんね。角度が良ければレアンノの山々を見られると聞いたことがあります、私は見たことがあります」

「確か、レアンノに足を踏み入れた人間はいないんだっけ？」

「正確には光暦に入ってから、ですね。それ以前はレアンノに住んでいた方々もおられました。……3000年以上誰も行っていないのは確かですけど」

そう、レアンノは聖地として崇められているにも関わらず『行く事が不可能』なのだ。

現在の飛空挺技術では高度約2500メートルに上がるのが限界で、ブースターを取り付けた軍用飛空挺でも約3000メートル以上には到達できない。

高度約5000メートルに存在するレアンノには誰も行けないのだ。

だから、レアンノにある都市なども全て聖書に記されたことしか分からない。

「まあ、一度は見てみたいもんだな。今日の夕方までに訓練が終わればいいけど……」

「……私が兵士さんたちに掛け合ってみましょうか？ レアンノが見たいという理由なら訓練を早めに切り上げるには十分な材料ですし」

「いや、いいよ。早く強くなって、お前を負かしてやりたいからな」

この頃、セティアとも打ち解けてきて普通の友達のように振る舞えるようになった。

お前、なんて王女に対する言葉としては不適極まりないが、友達として扱って欲しいというセティアの意向もあったし、公式の場ではしっかりと敬語を使っているため特に問題が生じたことはない。

「早く、私より強くなって下さいね」

「はは、そりゃ無理だ」

これまで寂しさを感じずに済んでいたのもセティアの存在が大き

かった。

もし孤独な旅をする羽目になっていれば、きっと毎日のように故郷を思つて泣いていただろうが、セティアという友人を得たことで寂しさを最低限に抑えることが出来ていたのだ。

そう、俺とセティアは、既に『友達』だった。

この2週間で、俺は男女間の友情が成立すると知った。

どちらも今のところ恋愛感情は抱いていない。

世話係という名の婚約候補者の肩書きはあるが、今はただの友達だ。

いつかこれが恋愛に発展することがあるかもしれないが、それはきっと遙か未来のことだろう。

何故かというと、今はそんなことを考えている場合ではないからだ。

次期国王が候補者に発表される日まで、まもなく1週間を切ろうとしていた。

第?章 王都騒乱 第?話 『友達』（後書き）

誤字脱字や文法的におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？話 リアと大男（前書き）

今回は短めです。

クオリティに乱れがうまくつていきますので近いうちに全面的な改稿を行う予定です。

第？話 リアと大男

光暦3650年8月5日

深夜

ルーディアス王国南西部・レーアン地方

商業都市アズール

side リア・ナイデルベルク

「王は恐らく、貴方を指名する気はないわ」

私は目の前で腕組みをしている大男にそう告げた。

これまでの思案顔から一転、訝しげな表情になって私に訊ねてくる。

「何故だ？」

「何故かなんて知らないわ。ただ、間諜の情報から総合的に考えれば、国王が貴方を次期後継者に指名しようと考えていると思えない」

そんなこと知ったことではない。

私の目的はあくまでも国王と、後継者をこの手で殺すこと。

あなたの依頼はついでもしかないし、もしあなたが次期国王になる人間だと最初から思ってたならとつくに殺してる。

今回の裏付けが取れたというだけだ。

「間諜の情報というのは？」

「最近、王の様子は明らかにおかしいわ。まるで死に支度をしてるみたいだね。国王は次期国王を発表してすぐに死ぬつもりでしょう。」

あなたが反駁する時間を残さずさつさと消えるつもりだわ」

これは盗み見た近衛慎也の思考とほぼ同じ。

私も彼の推測は正しいと感じていた。

国王は明らかに落ち着きをなくしているし、諜報魔術での探査の結果、国王は何故か夜半まで起きて何かをしている。

遺品整理なのか遺書を書いているのかまでは分らないが、普通の人間がとる行動でないことは間違いない。

「それは貴様にとっても問題ではないのか？」

「ええ、問題よ。私は国王を血祭りに上げたいのに、自ら服毒自殺されたら立場がないわ」

「なら、どうするつもりだ」

「もう手は打ってあるわ。国王が自殺しないようにする手立てはしつかりと、ね」

代わりにあなたには犠牲になってもらうけどね。

「そうか。にしても、後継者指名後すぐに自殺する、がどうして私に王の座を明け渡さない、という結論に結びつくのだ？」

王の座を明け渡す……ね。

国王がこいつを後継者に指名しようと思わない理由がよく分かる。

「簡単なことよ。あなたは今自他共に認める実質的次期国王の座にある。それをひっくり返すとなれば、あなたとその取り巻きの強烈な反発は必至。ならばあなたに反論する時間を与えずに自殺して、

新たな国王の体制にスムーズに移行する」

「なるほど……それなら理解できる。だが、国王はどうやら俺の力を見くびっているようだな。反論などしない。俺を王にしないなら王位を篡奪するまでだ」

「さすが、王族のくせに帝國と密通しているだけのことはあるわね」

私の言葉に大男の顔は驚愕に染まり、声を低くして脅すように聞いた。

「貴様……どこでそれを知った？」

「私を誰だと思ってるの？ 世界中に協力者がいるのだから、あなたの情報なんて簡単に分かるわ。帝國上層部とも縁故があるから」

「帝國上層部を殺して回った貴様が、帝國と、縁故だと？」

「帝國だって一枚板じゃないし、私が殺すべき人間は全て殺した。あとは利用できる奴だけよ」

「ほう……まあいい。今のうちに兵を集める算段を立てておいたほうがいいか……」

「それが一番いいんじゃない？ ただ、分かっているわね？」

「ああ。王と王女は殺さない。貴様のか……ッ!？」

続くであろう言葉を察し、私は鎌を掴むと刃を大男の首筋に押し当てた。

「それ以上言ったら、あなたの首が飛ぶわよ」

「あ、ああ……すまなかった」

大きな図体をしてる割に度胸はないようだ。

たかだか十歳過ぎの子供、しかも女に武器を突きつけられただけで謝ってくるなんて。

……こいつの性格なんて別にどうでもいいし、利用できるだけ利用してやればいい。

最後に捨てる事だけが確定事項だった。

「これからは気を付けなさい。自分はともかく、人に言われるのは大嫌いだから」

……人に言われるのは大嫌いだ。

自分ならともかく。

まあいい。

大男……アルゼム・レム・ルースエディアが言おうとしたことは事実だ。

そう。

自分の家族は、自分で殺す。

第？話 リアと大男（後書き）

誤字脱字や文法的におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

第？話 マティリオール公爵の考え

光暦3650年8月6日

昼（午前）

ルーディアス王国南西部・レノア地方

王都レードセリス・レードセリス城

第2中庭・鈴蘭の庭

side 近衛慎也

「……恐らく、その流れで間違いないでしょう」

俺の話が終わると、セティアは重々しい口調で言った。

剣術の訓練が一区切りついたところで、俺は自分の予想をセティアに話した。

国王が、発表終了後に自殺する可能性と、その理由。

「お父様はアルゼム様を指名するつもりがなく、他の方を後継者に任命する。そうすればアルゼム様が激怒するのは必至。だから自らが死に、アルゼム様が反論する暇なく速やかに新たな体制に移行する……理は通っていますし、最近お父様の行動がおかしいことの説明にもなります」

「どうする？ 今の状態のままだとどう転んだとしても大きな混乱が予想される」

「勿論、お父様を自殺させるつもりはありません。そして、国を混乱させるつもり也没有せん。マティリオール様に会いに行きます。」

あの方ならば有益な助言を頂けるでしょうから」

マティリオール様　この国の筆頭公爵で国王とも親しい人物だ。俺は会ったことがないが、その人ならば何らかの道筋を示してくれるかもしれない。

「それがいいと思う。マティリオールさんの家ってどこにあるんだ？」

「王都の貴族街に邸宅を持っています。いつもはロワルト地方におられますけれど、次期国王発表が近いたため今は王都に」

そういえばマティリオール氏も後継者候補だったか。

だが、国王と長い間友人関係を継続してきたのだから、少なくとも『敵』になることはないだろう。

「間がいいな。今から行くか？」

「はい。出来るだけ早くしなければ手遅れになる可能性があります。今から私と慎也さんの外出許可を申請してきますので正門の近くで待っていて下さい」

「分かった。着替えてくるからちよつと遅くなるかもしれないけど」

「私も着替えますから急がなくて大丈夫ですよ。むしろ私が遅れてしまうかもしれません」

「了解。じゃあとりあえず部屋に戻るよ」

「王が自死を企てている、という話ですな？、セティア様」

俺たちが公爵邸に入ると、初老の男がそう告げた。

突然の言葉に驚き、俺とセティアは顔を見合わせる。

「マティリオール様、どうしてそれを」

セティアの問いかけ。

どうやらこの老人がマティリオール氏のようなのだ。

国王の友人にしては少々老けすぎだと感じたが、王と同じような年頃ならまあありうるレベルではあるか。

「最近の状況を見ていれば簡単に推測できます。アルゼム様は国王としての素質がありません。彼に国を任せれば早晩ルーディアスは破滅するでしょう。王もそれは分かっておいでです。しかし、次期国王最有力候補としてアルゼム様の名が挙がってしまっている」

どうやら、マティリオール氏も俺と似たような見解を持っているようだった。

そして、国王が後継者にアルゼム氏を立てようとしないう理由が、これで見えてきた。

「アルゼム様は短気な方ですからな。もしも次期国王に自分以外の人間が選ばれたならば、怒り狂うことは確実でしょう。王は自死を選択し、アルゼム様を押さえ込もうと考えておられる。……王は、アルゼムのことを少々過大に評価していたようですね」

マティリオール氏の言葉から突然敬称が消えた。

それは、何か重大な事のように感じた。

そう、敬称を付けたくないと思えるような重大な状況が今発生しているのではないかと。

「アルゼムは自らが王に指名されなければ 兵を挙げるつもりです。王に選定されなければ、王位を篡奪するまで。このような野蛮な人間に国王が務まると私は思いません。それに、アルゼムは帝國と……我が国と敵対するルデキア帝國と密通している疑いもございます。もしも王がアルゼムを次期国王に選定しようとしたならば、私はお止めしたでしょう」

アルゼム氏は王族だ。

いくら腐っていたとしても、王族だ。

その王族が敵国と密通して、王位を篡奪しようとする。

それは日本という異世界から来た俺からしても異常なことだと思っただ。

「それを王には？」

俺の質問に、マテイリオール氏はため息混じりに言った。

「無論話しましたが。しかし、王に信じては頂けなかった。従兄弟がそのようなことをしてかそうとしているなど、さすがの王も信じられなかったでしょう。未だに王にとってアルゼムは十歳年下のかわいい従兄弟……なのですから」

「……ならば、私たちがどうかしないといけないということです
ね」

「そうですね。王の自死についてはアルゼムが反乱を起こした時点で必要性がなくなります。私がアルゼムを焚きつけて早めに王位篡

奪の計画を実行に移させましょう。しかし、さしものアルゼムも反乱については慎重になるでしょうから、発表までは動かないかもしれません。もしもアルゼムが発表まで動かなければ、セティア様：そして、慎也様、どうか王を止めて頂きたい。アルゼムについては私がどうにか致しましょう」

マティリオール氏の表情を見て、俺はこの人が『味方』だと確信した。

この人は俺たちを助けてくれる。
そして、王が死なず、混乱も起きない未来を作る役に立ってくれる。

だから、最も気がかりなのは『ブラッディ・カーニバル血の舞踏会』。

リア・ナイデルベルクの意図するところが一体何なのか、ということだった。

彼女の意図だけは未だに察しかねていた。

最も安易な考えが次期国王発表後に催される舞踏会で何かをする、ということだがそれはあまりにも露骨すぎるし、警備には聖堂騎士団も投入されるそうなのでいくらリアが強いといってもそう簡単に侵入できるとは思えない。

『血の舞踏会』が何らかの隠語であろうことは想像できるが、何の隠語なのかというところまでどうしても到達出来ずにいた。

それとも、召喚された時のあの声は、幻だったのだろうか。

いや、それよりもやるべき事がある。

まずアルゼム氏をどうにかしなければならぬ。

リアの事はあとでいい。

考えすぎてどちらも疎かになって最悪の結末を迎えることだけは避けたかった。

第?話 マテリオール公爵の考え(後書き)

誤字脱字や文法的におかしな表現の指摘、評価感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0847o/>

オーセティア興亡記

2011年6月16日18時15分発行